

生分解性ポット深植え定植による ピーマンモザイク病過敏反応の抑制技術

ピーマンモザイク病の発病圃場に抵抗性品種を直接定植すると、定植時の根の傷からウイルスが侵入してピーマンの抵抗性反応である過敏反応によって株が枯死したり、抵抗性を打破する新たな強毒ウイルスを発生させたりする恐れがあります。

発病圃場では抵抗性品種を生分解性ポットで育苗し、根を傷つけないようポットごと深植えすることで、慣行と同等の作業労力で過敏反応による枯死を抑制することができます。

生分解性ポット苗の定植方法与過敏反応の抑制効果

生分解性ポット苗は、子葉の付け根の上まで土に埋まるように深植えします（図1）。深植えの際、ポット上に汚染土が接触しても過敏反応による枯死を抑制できます（図2）。

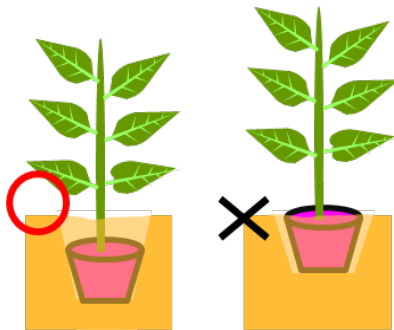


図1 生分解性ポット苗の定植方法

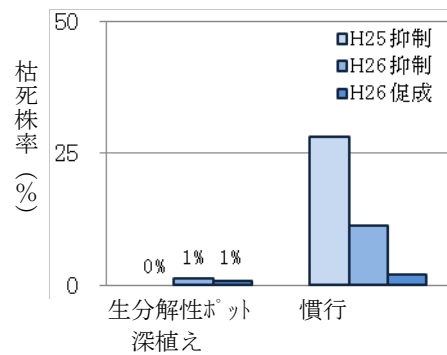


図2 過敏反応による枯死株率

定植労力と収量性

生分解性ポット苗は鉢内が乾きやすく、深植えにしないと定植後に何度も株元への手灌水が必要になります（図3）。しかし、深植えにすることで慣行定植と同じ手灌水の回数で管理できます。また、生分解性ポットの深植えは、慣行定植と比較して、定植時間、収量性ともほぼ同等です（図4）。

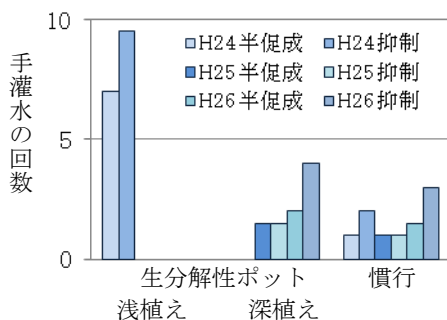


図3 定植後から活着までの手灌水の回数

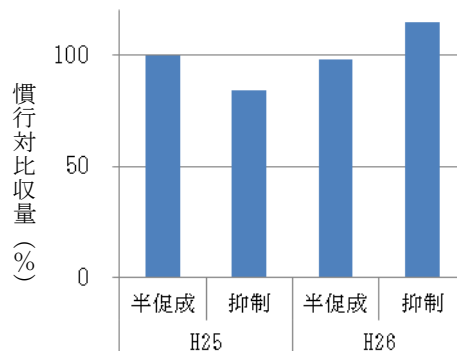


図4 生分解性ポットを深植えした場合の総収量（慣行を100としたとき）

活用上の留意点

- 1) 使用した生分解性ポットは生分解性樹脂 100%、底 1 穴、角 4 穴、側面スリットなし、口径 9cm です。育苗中にポットの底穴から根がでないように、網などを敷いた浮かし床で育苗しましょう。
- 2) 生分解性ポットの深植え定植は過敏反応による枯死を抑制する効果しかないため、発病圃場に感受性品種を定植し土壤伝染を抑制する場合は、より防除効果の高い紙包み法で定植する必要があります。